一傘轆轤百本ニ付　當五月直段、大貳拾三匁五分、中貳拾貳匁五分、小拾貳匁八分、當時引下ゲ賣直段、大拾九匁貳分、中拾七匁六分、小拾壹匁、

右者當五月書上後、前書之通、直段引下ゲ申候、依之此段申上候、以上、

諸色掛ヶ　佐内町　名主　八右衛門
南傳馬町　同　新右衛門

傘雜載

〔枕草子九〕人のいへにつきづきしき物

からかさ。

〔寶藏五〕傘

傘は雨の用意ながら、其工ことにして、すぼむれば手の中ににぎり、ひらけば其地百倍せり、神祇にかさぼこをかせば、釋教に說教師もかだけり、曾我殿ばらの夜打の場には、よきたいまつとて、五月やみをてらして、御所の前後をしゆごし奉れり、御上洛にもさきだてば、行幸にも去たがへり、木の下露は雨にまされるにや、松だけもひらけば、べに茸もさけり、かゝる珍重なるものを、なにとて山崎くだりの僧はわすれけんと、その茶屋もゆかし、

天にはるからかさもがなはるの雨

細工奇特竹兼紙　更曳膏油一德談　用舍異他售糖者　雨天不指日和開

〔尤の草紙下〕ひく物のしなじな

かさをはりては油をひく